Economic Bulletin of Senshu University
Vol. 52, No. 3, 1-20, 2018

処女地開拓の再検討

―ロシア：1954～1963年―

野部 公一*

＜要約＞

本稿は，フルシチョフ期における代表的農業政策であった処女地開拓を，言及されることが少なかったロシアの事例を中心として，かつ近年の研究動向を踏まえて，再検討する試みである。

本稿における主要な論点は，以下のとおりである。処女地開拓の決定・実施にあたっては，フルシチョフの個人的イニシアチヴに加え，西シベリアの地方党組織の指導者の積極的な関与が極めて重要な役割を果たした。また，開拓過程においては，指令・行政的方法が広範に利用されたことが確認された。処女地開拓は，1956年の史上最高の穀物収穫の達成をもって成功とみなされた。だが，開拓地区における生産・社会基盤は依然として，脆弱なままであった。このため，持続的な高収穫を達成することは困難な状態にあったが，過大な穀物調達が課せられ続け，種子用穀物の供出，虚偽の報告等が行われるようになった。また，貧弱な生産・社会基盤を反映して，収穫された穀物の質は，極めて低いものであった。

以上の事実，さらにはソ連解体により歴史評価の枠組みが変化したため，近年のロシアにおける処女地開拓に対する評価は，否定的なものが増えている。この関連で提起されるようになった典型的な見解が「処女地開拓の代わりに，ロシア中央部の農業の集約化に着手していたならば，成果はより大きなものになったはずである」というものである。だが，開拓過程で確認されたように1930年代の指令・行政的手法を広範に利用していた当時の指導者にとっては，集約化のような質的な課題の遂行は困難だったと思われる。処女地開拓は，その後に多くの解決すべき問題は残したが，その当時，唯一実行可能だった穀物不足問題の解決方法であったと考えられる。

JEL 区分：N54，O13，Q18
キーワード：ロシア，シベリア，処女地開拓，ソフホーズ，フルシチョフ

＊専修大学経済学部教授

1．問題設定

1954年２～３月のソ連共産党(以下，党)中央委員会総会は，カザフスタン・シベリア・ウラル・沿ヴォルガを中心とした処女地・休耕地の開拓による穀物増産を決定した。いわゆるフルシチョフの処女地開拓の開始であった。その後，わずか３年間で，当初の目標であった1300万ヘクタールを大きく上回る3590万ヘクタールもの土地が開拓された。1956年には，穀物収穫は史上最高を記録した。穀物問題は解決されたかに見えた。

処女地開拓は，フルシチョフ期を特徴づける農業政策のひとつとして，広く関心を集めてきた。ロシアにおいては，現在も節目となる年に式典が行われ，関連する研究が公表され続けている。ただし，近年の研究には，従来とは異なる２つの特徴が存在する。

第１の特徴は，ロシアの事例の言及が著しく増加したことである。従来の研究は，開拓の中心地であったカザフスタンをおもな対象としたものが圧倒的に多かった。これに対して，近年では，ロシアの個別の地方における処女地開拓に関する研究が進展している。とりわけロシアでの開拓の中心地であった西シベリアに関する研究が多数公表されている[1)]。

第２の特徴は，処女地開拓に対する否定的な評価が増加したことである。ソヴィエト期における処女地開拓に対する評価は，肯定的な評価が圧倒的に多かった[2)]。例えば，「勤労的積極性の輝かしい頁，農民，全ソヴィエト人民の偉大な業績」(История 1988：18) であり，「経済的に目的にかなっており有利な方策」(Богденко 1972：143) といったものであった。これらに対して最近の研究では，従来の見解を真っ向から否定するものも出現している。例えば，国家の指導者は，処女地開拓を行うことにより農業生産の集約化を拒絶してしまった（Томилин 2009：91)。このため，「処女地開拓にもかかわらず，国家の穀物バランスは強化されず，最終的には，海外での穀物買付けの著しい増加」をもたらした（Шмелев 2000：209)。さらに，処女地ソフホーズでの穀物生産は，原価と引渡価格を比較すると，実はそれは「相対的に高くない収益水準」に止まった(Андреенков 2016：149-150）等である。

本稿は，以上のような近年の研究動向を踏まえて，処女地開拓の意義および意味をロシアの事例の分析を通じて，再検討をおこなうとする試みである[3)]。なお，分析の対象としては，ロシアにおける処女地開拓の中心地であった西シベリア，とりわけアルタイ・クライ[4)]，ノヴォシビルスク州を中心とし，必要に応じて，ロシアの他地域およびカザフスタンについても言及する。

本稿の構成は，以下のとおりである。まず２．では，処女地開拓の決定過程において西シベリアの党組織からの提案が極めて重要な役割をはたしたこと，実際の開拓過程も個々の指導者の精力的な関与のもと，指令・行政的な方法をも駆使しつつ，「強襲的」におこなわれたことを明らかにする。続く３．では，1956年の高収穫により成功とみなされた開拓地の実情を検討する。そして，開拓地の生産・社会基盤は貧弱であり，持続的な生産が困難な状態であったことを明らかにする。そして，この困難な条件下で，穀物調達計画の達成のために行政的圧力が強化され，虚偽の報告すら行われるようになったことを指摘する。４．では，1960年代初頭以降とられた穀物生産増加のための方策とその帰結を明らかにする。また，シベリアの開拓地から収穫された穀物の質の問題を検討する。最後に５．では，以上の検討をふまえて，処女地開拓の意義，処女地開拓以外の選択肢の実現可能性について，ごく簡単に考察する。

2.「ボリシェヴィキ的強襲」

処女地開拓の検討は，1953年９月の党中央委員会総会直後から開始された。フルシチョフは，党地方組織代表を集め，処女地開拓を提起し，その可能性を討議した。だが，開拓は，必ずしも支持されたわけではなかった。とりわけ，後に開拓の中心地となるカザフスタン共産党第一書記のシャヤフメートフ（Шаяхметов, Жумабай Шаяхметович）は，開拓により放牧地が減少する恐れ，地元での専門家の不足および穀物輸送手段と保管設備の欠如等をあげ，極めて否定的な対応をした。また，クイビシェフ州，サラトフ州，チカロフ州，スターリングラード州の党委員会も，開拓に対して反対を表明した（Томилин 2009 83：MC 2013：207）。

このような状況の下，開拓推進に大きな影響を与えたと思われるのが，西シベリアのアルタイ・クライ，ノヴォシビルスク州，オムスク州の党組織からの積極的な提案であった（MC 2013：207）。とりわけ，アルタイ・クライの党第１書記ベリャーエフ（Беляев, Николай Ильич）の役割は大きかった。彼は，1953年10月に，フルシチョフあてに，アルタイには今後２年間で120万ヘクタールの開拓の余地があること，土地は肥沃であり最低限の農業技術の下でもヘクタール当たり16～20ツェントネルの収穫が見込まれることを訴えた（Сорокин 1998：24–25）。11月には，ほぼ同様の内容の提案が，アルタイ・クライ党委員会および執行委員会の連名で，党中央委員会へ提出された（Великий 1979：31–32）。そして12月には，開拓を訴えるベリャーエフの署名論文が『プラウダ』紙に掲載された。これ以降，同紙上では，処女地開拓の積極的な提起がおこなわれ，開拓推進に大きな役割をはたすことになる（Алейников 2005：27；Кузнецов 2005：14–15）。一方，1954年２月には，カザフスタン共産党指導部は，更迭された（Андреенков 2007：76）。

開拓準備は，極めて切迫した日程で実施された。開拓者は，しばしば，開拓の決定が正式に採択される前に，現地へと赴いた。例えば，処女地に出発するコムソモール員の最初の集会は，２～３月党中央委員会総会の前日の1954年２月22日にモスクワで開催されている。そして，アルタイ・クライの中心都市バルナウルには，最初の開拓者は総会開催中の２月28日から３月１日にかけて到着した（60-лет 2014：29）。

開拓地には必要な人員・機械が全国から送られた[5]。ソフホーズ,機械・トラクター・ステーション（以下，MTC）向けの人員は，おもにコムソモールを通じた組織的募集を主体として，さらに既存経営の熟練労働者を組み合わせる形で，確保が試みられた。第１表は，カザフ共和国西カザフスタン州に開拓のために組織された新ソフホーズ（以下，処女地ソフホーズ）の例である。同表からは，両者の比率は，経営ごとに相当異なっていること，コムソモール員だけで構成される経営も存在したことが見て取れる。

数的に主体となったのは，コムソモールを通じた組織募集であった。応募者にはコムソモールのパス（図）が渡され，それによって約50万人が処女地に派遣された。このうち，35万人は開拓キャンペーンの最初の３年間に集中した。同期間に，シベリアの処女地には12万6000人が派遣され，アルタイ・クライ，ノヴォシビルスク州，オムスク州には９万1000人が集中した（Андреенков 2016：149，198）。志願者に対する特恵措置として，かつての職の３カ月分の一時金と新しい職に移るための経費が支給された。また，処女地ソフホーズでは，15%の割増賃金が適用された（Богденко 1972：125）。

コルホーズ向けの人員は，土地の少ない地域からの組織的移民によって確保が試みられた。移民

第１表．処女地ソフホーズにおける労働力源泉
（西カザフスタン州の８ソフホーズの事例）

ソフホーズ名称	労働者総数	コムソモール経由	同比率(%)	その他
チャガンスキー	445	107	24.0	338
ドリンスキー	321	99	30.8	222
トルドヴィク	376	202	53.7	174
『プラウダ』紙名称	401	362	90.3	39
ウリヤノフスキー	388	286	73.7	102
ペレヴォソヴェツキー	427	427	100.0	0
「アク・スウ」	330	183	55.5	147
プガチョフスキー	557	173	31.1	384
計	3245	1839	56.7	1406

資料）РГАЭ：7803/6/1159/158.

«...только за счет освоения целинных и залежных земель в восточных, юго-восточных и других районах страны, — а эта работа партией и правительством уже начата, — мы имеем возможность увеличить посевные площади под зерновые культуры на несколько миллионов гектаров. Значение этого дела огромно. Зерновое хозяйство является основой всего сельскохозяйственного производства: чем больше мы будем производить зерна, тем больше будет не только хлеба, но и мяса, масла и других продуктов животноводства».

(Из Обращения Центрального Комитета Коммунистической партии Советского Союза ко всем избирателям, к рабочим и работницам, крестьянам и крестьянкам, к советской интеллигенции, к воинам Советской Армии и Военно-Морского Флота.)

КОМСОМОЛЬСКАЯ ПУТЕВКА

Советский
(название райкома)

райком комсомола
(название области)

г. Москвы области

вручает настоящую
„Комсомольскую путевку"
товарищу Глинке
(фамилия)
Анатолию Алексеевичу,
(имя, отчество)
изъявившему желание добровольно поехать на освоение залежных и целинных земель.

Секретарь райкома комсомола

М. П. 14 марта 1954 г.

図．コムソモールのパス（1954年３月14日発行）
資料）60-лет 2014：45.

の対象は，２人以上の労働能力をもつ世帯に限定された。この方法によって，1954～1956年にアルタイ・クライには7100世帯，オムスク州には1900世帯が移民した。なお，ノヴォシビルスク州には，1955～1956年に3600世帯（労働能力を有するもの約8000人）が移民した（Андреенков 2016：198）。移住者に対しては，一時金が支給された。同時に，（一定の範囲での）資産・家畜の無償運送，農業税の２年間の免除，ミシン・衣料・靴などの不足していた商品の優先購入権等の各種特恵措置が適用された（Пахомова 2007：434–437）。

農業機械は，開拓地に優先的に供給された。1954～1956年の間に，開拓地のソフホーズおよびMTCには，20万台以上のトラクター（15馬力換算）が出荷された。これは，当時の総出荷台数の

三分の一に相当した。開拓地域の農業機械は，急増した。例えば，1954年にアルタイ・クライのMTCでは，トラクターは50%，穀物コンバインは70%，貨物自動車は75%，それぞれ増加した。同時に，遠隔地の処女地・休耕地の開拓のため，ロシア全体で88，西シベリアでは40の処女地ソフホーズ[6]が組織された（CXX 2012：143；Андреенков 2016：198）。

開拓すべき土地の調査および選択，機械の輸送，人員の派遣等は，同時並行して実施された。このため，各地では大混乱が発生した。例えば，アルタイ・クライ西端部に位置するタブヌィ駅には，1954年4月に処女地ソフホーズ「アルタイ」の組織のために197人の開拓者が到着した。だが，その時点で，ソフホーズは「地図には印もなく，ステップには杭も打ち込まれていない」状態で，だれもその正確な位置を知らなかった。その後も開拓者は連日到着したため，彼らに対する食事・住居の確保は破綻した。地区党委員会は，地元住民の自宅での開拓者の受け入れを組織し，ようやく混乱は解消に向かった（Медников 1967：37）。

開拓者の多くは，農業に関連する職能を有していなかった。このため，各地では，トラクター手や畜産等，農業に関連する各種の講習会が組織された。だが，このことは，新たな騒動のきっかけとなった。例えば，1954年4月28日付けのカザフ共和国コクチェタフ州からの報告によれば，開拓者からは「専門に従って処女地を開拓しに来たのであって，雪を掘ったり，糞の中で動き回るためではない」という否定的な意見が表明された。講習は拒絶され，なにもせずに飲酒に耽り，無頼行為，罪を犯す者も現れたと言う（РГАЭ：7803/6/1131/68）。同様の事例は，広範に報告されている[7]

このような困難を打開したのは，地元の党指導者の精力的な指導であった。そこには，しばしば行政的・強制的な措置も伴っていた。以下に紹介するアルタイ・クライでの事例は，その典型的なものであった。

当時，クライ党委員会第1書記の任にあったのは，前述のベリャーエフである。彼は，後世,「スターリン的素質の指導者」とも評されることもある人物であった（Сорокин 1998：12）。彼は，クライにおいて，開拓の是非に関する議論を許さなかった。「より多くの処女地を，より多くの穀物を」というスローガンを徹底し，農村に全権代表と監察官を派遣した。彼は「地区委員会の玄関まで開拓せよ」と命じ,「地平線から地平線まで耕せ。山が邪魔するなら，われわれはそれを均すだろう」と豪語したという（Сорокин 1998：27–28）。

1954年4月2日に開催された第2回クライ党委員会総会では，早くも開拓目標の上方修正が議論された。7月30日～31日に開催された第3回クライ党委員会総会では，ベリャーエフは,「ロマノヴォ地区党委員会，ビィスク牛乳トラスト」の「反処女地」的態度を痛烈に批判し，責任者の解任および党からの除名を断行した。こうした命令・指令的処置の後，アルタイ・クライにおける開拓は，より順調に展開することになった（Алейников 2005：30–32）。

全面的集団化を想起させるような取り組みの下，開拓面積を拡大しようとする熱狂が生まれ，計画は超過達成された。1954年のアルタイ・クライにおけるコルホーズによる開拓地への播種は86万7000ヘクタールに達し，計画の55万3000ヘクタールを大きく上回った（Алейников 2005：33）。また，アルタイ・クライにおける開拓面積は，西シベリアの半分を超えた。それは，ロシア全体でも26%，ソ連全体でも12%に相当していた。

開拓面積を拡大しようとする熱狂は，ソ連全体でも発生した。その結果，開拓面積は1954年8月10日時点で1340万ヘクタールに達し，「1955年までに1300万ヘクタール」という当初目標は超過達成された。このことにより，目標はさらに上方修正され，最終的には「1956年までに，2800～3000万ヘクタール」と当初の2倍を超えるものとなった（Андреенков 2016：199）。そして，この目標

第２表．開拓面積の推移（1954～1960年）

単位・千ヘクタール

地域	1954年	1955年	1956年	1954–56年	1957–60年	1954–60年	対ソ連（%）	対ロシア（%）
ソ連	18993	14012	2895	35900	5936	41836	100.0	—
カザフ共和国	8531	9436	1933	19900	5584	25484	60.9	—
ロシア共和国	8667	3119	663	12449	3903	16352	39.1	100.0
シベリア	5303	1570	444	7317	2989	10306	24.6	63.0
西シベリア	4337	1057	203	5597	1357	6954	16.6	42.5
アルタイ・クライ	2311	397	39	2742	131	2873	6.9	17.6
ノヴォシビルスク州	668	288	80	1036	513	1549	3.7	9.5
オムスク州	943	170	20	1113	266	1399	3.3	8.6
東シベリア	966	513	241	1720	1632	3352	8.0	20.5

資料）Андреенков 2016：199–200.

も，超過達成された（第２表）。

人々を動員し，熱狂させる手法は，1954年の収穫においても，遺憾なく発揮された。アルタイ・クライ党委員会は，次のようにコンバイン手に訴えた，「圧縮された期間で収穫を実施するために，すべてのコンバイン機械は一昼夜に20時間以上活動しなくてはならない。規準作業量を超過達成するまで，耕地を離れるな。コンバインに照明を装備せよ。穀物をいかなる天候でも，昼も夜も収穫せよ」（Сорокин 1998：29）。

より多くの収穫を目指す社会主義的競争に，人々は積極的に参加した。気象条件も良好であったことから，西シベリアにおける穀物収穫は，前年の2.4倍になった。なかでも，アルタイ・クライの穀物収穫の増は，とりわけ飛び抜けたものとなった。それは，1953年の173万3000トンから1954年には715万9000トンまで増加し，前年比で4.1倍にも達したのである。

1954年における処女地開拓は，1955年の播種に利用する土地の耕起に主眼がおかれ，開拓地における播種面積の拡大は，限定的なものであった（アルタイ・クライで32%，オムスク州で20%，ノヴォシビルスク州で15%）。穀物収穫の増加は，開拓による播種面積の拡大というよりも，単位面積当たり収穫量の向上にその主因が存在した。しかも，そこには1953年の単位面積収穫量が比較的低かったことが，大きな影響を及ぼしていた（第３表）。だが，穀物生産の増加は，処女地開拓の方針の正しさの証明と解釈された（Андреенков 2016：199）。開拓を精力的に実施した西シベリアの党指導者は，中央の党および政府機関の要職に抜擢された。彼らの多くは，その後も開拓地区の農業とのかかわりをもち，その成果に左右されることになる。例えば，ベリャーエフは，1955年に党中央委員会書記に転出した。その後，彼は，1956年には党中央委員会ロシア共和国ビュローの副議長，1957年には党中央委員会幹部会員，同年12月には開拓の中心地であるカザフスタン共産党の第１書記といった要職を歴任した。だが，1959年のカザフスタンにおける穀物生産の不振は，翌年，彼を年金生活に追い込むことになる（Андреенков 2007：117；Регион 2009：647）。

1954年に開拓された土地のすべてに播種が行われる1955年は，さらなる収穫が期待された。だが，旱魃によりその期待は裏切られた。しかし，1956年には，気象条件にも恵まれて，開拓地では未曾有の高収穫が達成された。カザフ共和国，アルタイ・クライ，クラスノヤールスク・クライ，オム

第３表．1954年の増収要因

	1953年	1954年	%
アルタイ・クライ			
穀物播種面積（千ヘクタール）	3529	4669	32.3
穀物収穫量（千トン）	1733	7159	313.1
ヘクタール当たり収穫量(ツェントネル)	4.9	15.3	212.2
オムスク州			
穀物播種面積（千ヘクタール）	1912	2297	20.1
穀物収穫量（千トン）	1508	2346	55.6
ヘクタール当たり収穫量(ツェントネル)	7.9	10.2	29.1
ノヴォシビルスク州			
穀物播種面積（千ヘクタール）	1850	2120	14.6
穀物収穫量（千トン）	1121	2920	160.5
ヘクタール当たり収穫量(ツェントネル)	6.1	13.8	126.2

資料）Андреенков 2007：198-199.

スク州，ノヴォシビルスク州，チェリヤビンスク州，チカロフ州，サラトフ州には，高収穫達成に対して，レーニン勲章が与えられた（Великий 1979：302)。処女地開拓は，大成功のうちにキャンペーンを終了させたのである。

だが，「成功」の裏では，誤りと行き過ぎも発生していた。開拓にあたっては，詳しい土壌地図が欠如していた。このため，「肥沃度の低い土地ないしは著しく雑草の繁茂した土地」も収用されてしまった。この結果，経営が不都合な土地の開拓を強制され，そのため定まっていた輪作が侵犯された（Медников 1967：44)。

この傾向は，開拓面積目標が上方修正されたことによって，さらに強まった。開拓初期においては，質の劣った土壌の開拓が，地方機関により，「穀物生産拡大のための重要な余力」としてみなされるようになったのである。例えば，ノヴォシビルスク州では，1955年４月27日付けの州執行委員会および州党委員会ビュロー合同決定において，塩性土壌の開拓が決定されている（Андреенков 2007：91)。また，カザフ共和国アクチュビンスク州では，ソフホーズの開拓目標に未達成の恐れが発生したので，初期には開拓の対象外とされていた，より質の悪い土地を開拓対象に加えることが申請されている（РГАЭ：7803/6/1132/35)。以上の事例からは，計画目標の超過達成のため，より質の悪い土地の開拓が試みられるという関連が，明瞭に見て取れる。このような処置は，その後，大きな否定的影響を与えることになる。

なお，シベリアにおける開拓の特徴は，それがコルホーズ主体でおこなわれたことにあった（第４表)。開拓面積の80%以上は，コルホーズによるものであり，ソフホーズの比率は高いものではなかった。だが，1957年以降には，コルホーズは開拓した土地を有効に利用できないと判断され，MTC とともにソフホーズに再編されることになる（以下，コルホーズと MTC を基盤に新たに創出されたソフホーズを「転換ソフホーズ」と称す)。このことにより，転換ソフホーズが多いというシベリア農業の組織上の特徴のひとつが形成されることになる（後述)。

第４表．経営別開拓面積（1954～1956年）*

	全面積（百万ヘクタール）	コルホーズ		ソフホーズ	
		百万ヘクタール	%	百万ヘクタール	%
ソ連	35.9	21.6	60.2	14.3	38.8
カザフ共和国	19.9	10.3	51.7	9.6	48.3
ロシア共和国	14.9	10.3	69.1	4.6	30.9
シベリア	7.2	6.0	83.3	1.2	16.7
西シベリア	5.5	4.7	85.4	0.8	14.6
東シベリア	1.7	1.3	76.4	0.4	23.6

資料）CX 1960：223.
注*地域別のデータは，他のソースと必ずしも一致しない。

３．攻勢限界

1957年以降も開拓は続いたが，その面積は激減した。その一方で，開拓地には，多くの資金投入が必要とされたが，その確保は次第に困難になっていった。処女地開拓は，軍事行動でいうところの「攻勢限界」に達していた。

開拓地区には，多くの農業機械が供給された。この結果，1954～1958年の間に，西シベリアのトラクター数は32%の増，穀物コンバインは約２倍に増加した。東シベリアにおいては，トラクターは29%の増，穀物コンバインは43%の増であった（Андреенков 2008：202）。ただし，機械の質は，必ずしも高くはなかった。例えば，1954年春のオムスク州では，トラクターの30%が稼働しなかった。このうち半分は，機械・器具の技術的故障が原因であった（Андреенков 2007：78）。また，確かに機械は増えたが，それは拡大する開拓面積に対応するものではなかった。例えば，アルタイ・クライにおける穀物コンバイン１台当たりの作業面積は，1956年に281ヘクタールに達した。これは収穫作業を25～31日と相当長期に想定したとしても，その際に必要になる機械の60～70%程度にしか相当しなかった（Алейников 2005：93）。

機械の修理工場は長らく整備されず，ただでさえ不足している機械の稼働率を著しく低いものとした。1957年には，ロシアのMTCの修理工場のうち，基本的な要求をかなえていると判定されるものは，60%に止まっていた。それは，オムスク州とノヴォシビルスク州では50%，アルタイ・クライでは40%に過ぎなかった（Андреенков 2008：204）。状況は，処女地ソフホーズにおいても同様であった。1957年にはロシアの87の処女地ソフホーズのうち，大修理を行うことのできる修理工場があったのは，わずか34経営であった[8]（РГАЭ：7486/21/378/51）。

開拓地区における住宅，文化・生活施設は，未整備のままであった。例えば，ロシアの開拓地区のMTCでは，中央広場に恒常労働者の30%を居住させるためには，300万平方メートルの住宅建設が必要とされたが，1957年には24万平方メートル分の予算しか計上されていなかった（Андреенков 2007：94）。にもかかわらず，MTCに対する社会・生産インフラへの投資額は，1954年の17億1000万ルーブリ，1955年の13億3600万ルーブリ，1956年の13億500万ルーブリから，1957年には５億5700万ルーブリと大幅に削減された（Андреенков 2008：204）。

状況は，処女地ソフホーズにおいても同様であった。1957年までに処女地ソフホーズには，１経

営当たり800万ルーブリが支出された。しかし，これによって実現できたのは，最小限必要な住宅フォンド，穀物倉庫，商店，食堂，ベーカリーを有する中央広場の整備だけであった。とりわけ住宅不足は深刻であり，一人当たり３平方メートル分しか確保されていなかった。このため，1958～1960年の間には，１経営当たり1800万ルーブリの投資が必要とされていた（РГАЭ：7486/21/378/52）。

処女地ソフホーズでの生活は，かなり厳しいものであった。このことを，タチヤーナ・レオノーヴァの1956年の回想から紹介しよう。彼女は，その当時，モスクワの農学系大学の２年生であったが，通常の圃場実習に代えてコムソモールからの呼びかけに応じて，処女地ソフホーズでの収穫作業に参加した。行き先は，チカロフ州ダンバーラフスキー地区のアダモフスキー・ソフホーズであり，７月11日から９月25日まで滞在した。ソフホーズの中央広場は，ある程度整備が進み，標準的な住居，商店，食堂が存在していた。ただし，実際に作業に従事した第10ブリガーダの区域では，トレーラーホーム（вагончик）の他，炊事場・食堂があるだけであった。水道はなく，水は樽で運ばれていた。食事は，最初の頃は，パスタ（вермишель），挽き割り，缶詰肉だけであり，野菜も果物もなかった。８月末になってようやく，じゃがいも，キャベツ，きゅうり，リンゴが提供されるようになった（60-лет 2014：254–255）。

移動販売車の巡回は，数少ない娯楽であり，お祭り騒ぎになった。しかし，商品・食品の種類は多くなかった。甘いもの，バケット，量り売りのマーガリン，キャンディ，グルジア茶，糖蜜菓子，炭酸入りミネラルウォーター，石鹸，歯磨き粉，衣類，オーデコロン等が販売された。靴は処女地では，手に入らなかった。収穫期を通じて貧相な食事で暮らしていた学生たちは，帰路の鉄道では，駅につく毎に売店へ飛び込み，売られているものはアルコールを含めて，すべて一気に平らげたという（60-лет 2014：255–256）。

もっとも簡単な家具の欠如，パン・野菜，食肉・乳製品の供給途絶が報告される例もあった（Андреенков 2007：83–84）。処女地ソフホーズでの生活を「何か別の惑星」と評した者もいる。彼によれば,「すべてが戦争と同様であった。指揮官から命令を受け取り，それをいかなる犠牲によっても遂行する」のだという（Андреенков 2007：95）。

過酷な環境のため，労働者は定着せず流動した。これには，1956年に前年まで適用されてきた15%の割増賃金が廃止されたことも，大きな影響を与えた（Андреенков 2007：95）。アルタイ・クライの処女地ソフホーズでは，1957年まで経営に残った者は，全体の「四分の一以下」でしかなかった（Медников 1967：40）。個々の処女地ソフホーズでは，状況はさらに深刻であった。カザフ共和国アクモリンスク州のソフホーズ「熱狂者」においては，1955年の１月１日から11月15日までの間，235人の労働者を受け入れたが，その間に186人が離職しており，流動率は79.1%に達していた（РГАЭ：7803/6/1159/58）。なお，離職の理由は，第５表のとおりであった。

開拓地区は，機械不足および労働力不足に悩むことになった。このため，開拓の一方で，多くの土地の利用が放棄され，新たに休耕にされた[9]。1957年には，その規模はロシア共和国で116万ヘクタール，カザフ共和国では132万ヘクタールに達した（РГАЭ：7486/1/8308/47–48）。アルタイ・クライでは，287万3000ヘクタールの開拓が行われたが，1954～1962年に63万1900ヘクタールが，1963～1965年にはさらに約100万ヘクタールが休耕とされた（Андреенков 2008：204；Андреенков 2016：199–200）。

労働力不足を補うために，処女地地区への他地域からの応援が常態化した。例えば，1956～1958年の処女地における収穫には，300万人以上の学生，労働者，軍人が派遣された。このような動員

第５表．ソフホーズ「熱狂者」における離職状況
（1955年１月１日～11月15日）*

理由	人	理由	人
他の機関への移動	64	病気のため	10
自己都合	33	労働規律の侵犯	5
家庭の事情	31	死亡	4
逃亡	19	就学	3
兵役のため	16	受刑のため	1

資料）РГАЭ：7803/6/1159/58.
*この他，10月12日に休暇が終わったにもかかわらず，11月15日時点でソフホーズに復帰していない者が11人存在した。

は，穀物原価をひきあげ，それをロシア中央部よりも高いものとした（Томилин 2009：84）。

労働力不足による土地利用の非効率化という問題は，コルホーズにおいて，より深刻なものとなった。アルタイ・クライでは，MTC によりコルホーズの235万8000ヘクタールの土地が開拓された。この結果，労働能力を有しているコルホーズ員一人当たりの土地面積は，極めて広大なものとなった。例えば，ソロネシノエ地区においては，地区平均で45ヘクタール，同地区のコルホーズ「赤いパルチザン」では115ヘクタールに達した。このため，「コルホーズは，恒常的な援助なしには，播種も，得られた実りの収穫もできない状態」になった。開拓開始以降，アルタイ・クライのコルホーズには，機械だけでなく，国有企業や機関，軍から多くの労働力が派遣されるようになった。これらは，国家に追加的な支出を強制し，さらには，工業企業の生産計画の遂行に否定的な影響を及ぼした（Медников 1967：66–67）。

このような事態を是正するための手段として採用されたのが，転換ソフホーズの創出であった。コルホーズのソフホーズへの転換には，フルシチョフの私見も影響を与えている。回想録によれば，フルシチョフは，視察先の処女地の MTC の農業技師との会話の中で，処女地における穀物経営は，ほぼ完全に機械化され，MTC によって遂行されているので，「処女地におけるコルホーズは，まったくの虚構」であり，コルホーズ員は穀物を受け取っているだけであることを指摘されたという（Мемуары 1994：101）。

フルシチョフは，この後，処女地においてはソフホーズが優先されるべきであり，コルホーズはソフホーズに転換されるべきであるとの見解を抱くようになった。この処女地におけるソフホーズの優先的組織は，1954年６月５日付け党中央委員会幹部会あてメモの中にも，重要な論点のひとつとして盛り込まれている（Хрущев 1 1962：299–301）。

だが，実際には，穀物生産の全過程におけるコルホーズ員の労働貢献は，過小評価できない。たしかに播種・収穫といった基本的農作業は機械化されていたが，収穫された穀物の精選および乾燥作業，それぞれの過程での穀物の積み下ろしは，基本的にコルホーズ員の手作業でおこなわれた[10]。そして著しく労働集約的なこれら過程には，耕作・播種・収穫の合計の２倍以上の労働力が投入されていたのである（中山 1976：175–176）。この意味で，コルホーズ員の労働力は不可欠なのであり，そうした重要な労働力を自力で確保できないコルホーズは，より容易に労働力の確保が可能なソフホーズに転換されることになったのである[11]。

以上の事態をふまえ，開拓地区における「土地の多いコルホーズ」は，MTC とともに，ソフホ

第６表．ソフホーズ・転換ソフホーズ数の推移（1953～1963年）

	1953年	1956年	1957年	1960年	1963年
ソ連	4857	5098	5905	7375	9176
うち転換ソフホーズ		161	916	2229	3378
ロシア	2780	2793	3144	4047	4817
うち転換ソフホーズ		123	511	1269	1774
西シベリア	363	363	477	519	673
うち転換ソフホーズ		3	117	161	240
東シベリア	109	111	144	187	288
うち転換ソフホーズ		2	29	68	178

資料）РГАЭ：7486/21/513/52-53.

ーズに転換されることになった。アルタイ・クライでは，1957年３月に，435のコルホーズと65のMTCが再組織され，42の転換ソフホーズの新設と85の既存ソフホーズの大規模化が実施された（Медников 1967：70）。同様の理由によるコルホーズのソフホーズへの転換は，その後も，アルタイ・クライのみならず，その他の開拓地区でも広範に実施された（野部1991：208-210）。この結果，ソフホーズ数および転換ソフホーズ数は，着実に増加した（第６表）。

開拓が進行するにつれ，土地利用秩序は破壊されていった。開拓は，そもそも穀物問題解決のための一時的・非常手段として採用された。そのため，初期は，処女地・休耕地の豊かな肥沃度を最大限利用するために，穀物の連作が予定されていた。ただし，許容される連作期間は統一的されておらず，条件によっては「７～10年間」可能との主張も存在していた（Андреенков 2007：100）。さらには開拓によって，すでに利用されている輪作が侵犯されてしまう事例も発生した（Медников 1967：44）。

混乱の中，コルホーズ・ソフホーズの圃場は，すでに「生産区画（производственные клетки）」に分けられているので，「輪作はまったく必要がないという『理論』」すら出現した。一連の地区で土壌中の水分保持および雑草の除去に絶大な意義をもつ純休閑地は減少した（Иржичко 1956：18）。西シベリアのコルホーズでは，純休閑地の播種面積に対する比率は，1953年の24％から1958年には9.7％まで低下した。1959年の時点で輪作を利用しているコルホーズは，西シベリアで15.5％，東シベリアで11.4％まで低下した（Сибирь 2002：278）。処女地ソフホーズでは，輪作導入・利用の前提となる土地整理すら満足に行われていなかった。ロシアには88の処女地ソフホーズが存在したが，1957年の時点で土地整理計画を作成したものは67，土地整理を実施したものは47に止まった。純休閑地の比率は，サラトフ州で7.6％，オレンブルク州で９％に止まった（РГАЭ：7486/21/378/53）。このように，多くの経営は，事実上，作物交代なしの小麦のモノカルチャー経営へと移行していった。これにより土壌の肥沃度は低下し，その後の雑草の繁茂，風蝕・水蝕の遠因となったのである。

処女地の潜在力は，時間の経過とともに失われていった。しかし，処女地からの穀物調達の必要性は変わらなかった。1950年代後半において農産物調達増加と加速化に大きな役割を果たしたのが，地元機関により中央の承認の下に計画を上回る調達課題を定めるという方法であった。この手法は，本来の計画化規定と矛盾するものであったが，広く実践されていた（Андреенков 2007：115）。さ

らに1954年の処女地における穀物調達の「成功」と地方指導者の「抜擢」は，党地方機関に，ますます大きな刺激を与えたものと推察される。かくして，収穫が少なくなる中，より多くの穀物調達が要求されることとなった。このことは，当然のように，より厳しい行政的圧力が加えられることを意味していた。

その典型例は，ノヴォシビルスク州の事例で確認することができる。同州は，1956年にヘクタール当たりの11.3ツェントネルの穀物収穫を達成した。この収穫のもとで，当初6000万プードだった計画課題を大きく上回る１億100万プードの穀物が国家に引渡され，州はレーニン勲章を受賞した。その後，州のヘクタール当たりの穀物収穫量は，1957年に10.7ツェントネル，1958年に8.6ツェントネルと低下した。しかし，州党委員会は，穀物を１億プード以上引き渡すという課題を，一切変更しなかった（Андреенков 2004：155–156）。この結果，州党第一書記コーベレフ（Кобелев, Борис Николаевич）のもと実施された1957～1958年の穀物調達キャンペーンは，極めて過酷なものとなった。「非常事態」の緊迫した雰囲気が生まれ，行政的強制が一般化していった。それは「強襲的」指導方法を引き起し，「人民の敵」「害虫」「クラーク」等のスターリン的なレッテルの復古がもたらされた。「スターリン・スタイルの指導」が事実上，戻ってきたのであった。不満を抱いた地区党書記は，コーベレフとの対話を試みたが，彼は一切とりあわなかったという（Андреенков 2004：156–158）。

こうした状況下で，穀物調達達成のために，種子用穀物の引渡しが強制された。とりわけ多くの種子用穀物が調達されたのは，1958年であった。このため，1959年の播種キャンペーンに際して，種子は「数万トン」の不足となった。さらに播種計画は，前年よりも，春小麦で12万5000ヘクタール，燕麦で10万ヘクタールも縮小された。このような圧力にもかかわらず，ノヴォシビルスク州は，1958年の穀物調達を達成できなかった。その後，実態が判明し，コーベレフはクラスルヤルスクのコンバイン工場長に左遷された。また，1959年４月２日には，ノヴォシビルスク州での事態を批判する決定が採択された（Андреенков 2004：159–160）。

だが，同様の穀物調達をめぐる問題は，繰り返された。1961年には，オムスク州で不明瞭な処理（穀物の「立毛」での引渡し）が発覚した。1961年１月の党中央委員会総会でも，ふたたび，「種子の供出」の強制問題が審議されている（Андреенков 2007：122–124）。ボリシェヴィキ的強襲は，1930年代を彷彿とする様々な実践をも再現してしまったのであった。

４．「リンゴの実はリンゴの木の近くに落ちる」

処女地開拓においては，常に量的な課題が追求され，質的な課題は軽視された。それは，全面的集団化期にも相通ずるものであり，同じ種類の失敗をひきおこした。それはまさに「蛙の子は蛙」であり，ロシアでの言い方に従えば「リンゴの実はリンゴの木の近くに落ちる」であった。

土壌肥沃度の低下および農業技術の侵犯は，処女地における穀物収穫を次第に減少させた（第７表）。粗放的な穀物経営は，1950年代末には，限界に達しつつあった。だが，農業への新規投資は行われなかった。打開策として採用されたのは，純休閑の廃止による播種面積の拡大と農業への党の指導の強化であった。それは，数的な課題をより強い圧力のもとで追求するのと同意であった。

だが，純休閑の廃止は，開拓地区の条件では，決定的な誤りであった。これにより，播種面積は増加したが，それは雑草の繁茂と土壌浸蝕の拡大をもたらした（野部 1990：54–57）。農業への指導を強化するため，1962年３月の党中央委員会総会では，地域ソフホーズ・コルホーズ生産管理部

第７表．西シベリアにおける穀物経営（1953〜1964年）

	1953年	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年
穀物播種面積（千ヘクタール）												
ソ連（百万ヘクタール）	106.7	112.1	126.4	128.3	124.6	125.2	119.7	115.5	122.3	128.7	130.0	133.3
ロシア	68161	72544	77537	75775	73828	74082	70826	73536	77277	79181	79398	81645
西シベリア	8516	10376	12396	11992	12923	12517	12448	12564	12589	13069	12129	12628
アルタイ・クライ	3529	4669	6047	5550	6066	5753	5808	5788	5885	5988	5095	5721
オムスク州	1912	2297	2559	2507	2709	2612	2667	2782	2747	2887	2644	2793
ノヴォシビルスク州	1850	2120	2436	2559	2766	2772	2661	2734	2692	2792	2921	2762
穀物収穫（千トン）												
ソ連	82487	85568	106773	127582	105041	141216	125905	125490	130790	140183	107492	152071
ロシア	48226	56304	59448	72006	59217	79041	69638	76201	73694	86754	65789	87010
西シベリア	5368	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	13971	12508	13326	11842	9054	4343	12470
アルタイ・クライ	1733	7159	3117	7502	N.A.	7470	5707	6387	5785	3829	1739	5682
オムスク州	1508	2346	1143	3218	N.A.	2734	2739	2731	2497	2064	808	2984
ノヴォシビルスク州	1121	2920	1151	2888	2892	2396	2585	2778	2234	1864	885	2293
ヘクタール当たり収穫量（ツェントネル）*												
ソ連	7.7	7.6	8.4	9.9	8.4	11.3	10.5	10.9	10.7	10.9	8.3	11.4
ロシア	7.1	7.8	7.7	9.5	8.0	10.7	9.8	10.4	9.5	11.0	8.3	10.7
西シベリア	6.3	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	11.2	10.0	10.6	9.4	6.9	3.6	9.9
アルタイ・クライ	4.9	15.3	5.2	13.5	N.A.	13.0	9.8	11.0	9.8	6.4	3.4	9.9
オムスク州	7.9	10.2	4.5	12.8	N.A.	10.5	10.3	9.8	9.1	7.1	3.1	10.7
ノヴォシビルスク州	6.1	13.8	4.7	11.3	10.5	8.6	9.7	10.2	8.3	6.7	3.0	8.3

資料）Андреенков 2007：198–199.
*筆者計算。簡便な「収穫量÷播種面積」で算出したため，他ソースの統計とは必ずしも一致しない。

（ないしは地域コルホーズ・ソフホーズ生産管理部）の組織が決定された。さらに，1962年11月の党中央委員会総会では，州レベルの党委員会を農業と工業の二つに分割することが決定された（Андреенков 2007：179–180）。しかし，あまりにも短期間での大規模な関係機関の再編は，指導の強化よりもその混乱をもたらした。

1961年の西シベリアの穀物収穫は，前年と比較して11％減少した。1962年には乾燥した天候により，穀物収穫はさらに20％以上も減少した。1963年には，処女地地区は「壊滅的な旱魃」に見舞われた。アルタイ・クライでは，「黒い暴風」により65万8000ヘクタールの播種（うち穀物は58万3000ヘクタール）が壊滅ないしは強度の被害を受けた。これは播種全体の８％，穀物播種の11％にも相当した。一連の経営で，ヘクタール当たりの穀物収穫は１〜２ツェントネル程度に止まった。アルタイ・クライ全体でも，それは3.7ツェントネルでしかなかった（Андреенков 2016：214）。

1963年のアルタイ・クライ，ノヴォシビルスク州，オムスク州の穀物引渡しは，わずか48万3000トンに止まった。シベリアおよびソ連全土で，飼料用だけではなく食用穀物の先鋭な不足が発生した。パンを求める行列が発生し，大規模穀物輸入が開始された（Сибирь 2002：278；CXX 2012：

第８表．アルタイ・クライの穀物受領所における穀物への異物混入度の推移（1954～1960年）

単位：％

	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	平均
雑草夾雑物の混入								
純正および中位純正	51.3	45.5	30.0	24.2	21.4	21.4	9.9	29.0
混入・制限規格内	40.5	44.7	50.7	45.3	49.0	39.0	34.6	43.5
混入・制限規格超	8.2	9.8	19.3	30.5	29.6	40.0	55.5	27.5
混入計	48.7	54.5	70.0	75.8	78.6	79.0	90.1	71.0
異種穀粒の混入								
純正および中位純正	58.5	54.0	29.8	45.6	52.5	60.0	55.0	50.7
混入・制限規格内	32.8	42.3	45.8	48.5	42.5	35.0	40.0	41.0
混入・制限規格超	8.7	3.7	24.4	5.9	5.0	5.0	5.0	8.3
混入計	41.5	46.0	70.2	54.4	47.5	40.0	45.0	49.3

資料）Мельников 1961：88.

156）。

処女地開拓においては，開拓面積と播種面積の拡大が一貫して追求された。手頃な開拓対象地がなくなった後には，純休閑地が面積拡大の対象とされてしまった。それは初歩的な農業技術の侵犯をもたらし，旱魃を一大惨事に変えてしまった。

その反面，開拓当初に提起されたヘクタール当たり収穫量は，ほぼ一貫して達成されることはなかった。それは，1954年２～３月の党中央委員会総会では，「14～15ツェントネル」，先進的経営では「20～25ツェントネル」とされていた（КПСС 8 1985：366）。また，1954年６月の党中央委員会総会でのフルシチョフ演説においては，適切な耕作の下で「20～30ツェントネル」とされていた（Томилин 2009：84）。これに対して，実際のアルタイ・クライにおけるヘクタール当たりの小麦収穫量は，1956～1960年の平均で11.7ツェントネル，1961～1965年の平均では7.1ツェントネルに過ぎなかった（Алейников 2005：47）。このことは，耕作の質に深刻な欠点があったことを示唆している。

収穫された穀物は，質の面でも問題があった。例えば，1957年初頭に小麦粉精製用に調達された小麦のうち品質的に適合していたのは，ノヴォシビルスク州で38.1％，アルタイ・クライでは39.8％でしかなかった。このため，ノヴォシビルスク市では，生産が予定されていた53種類のパンのうち市場に出荷できたのはわずか26種類にとどまった。また，商店の棚からは「もっとも要求されている種類のパンが事実上なくなった」。ロシア全体の製パン用の小麦の不足量は，1957年前半だけで243万8700トンにも及んだ（Андреенков 2007：128–129；CXX 2012：153）。

穀物の質の深刻な低下の要因は，圃場での雑草の繁茂に加えて，収穫後精選および乾燥作業，保管，輸送の各段階で不備があり，その品質が不断に損なわれていったためである。

まずは，圃場での雑草繁茂の状況である。それは，アルタイ・クライの穀物受領所における異物混入度の推移で確認することができる。第８表によれば，雑草夾雑物の混入度は，年とともに増加し，1960年には全体の９割を超えてしまったことが確認できる（制限規格も超えてしまったのは全体の半分以上）。ロシアおよび開拓の中心である西シベリアの1958年の状況は，第９表で確認することができる。同表によれば，1958年にアルタイ・クライから調達された穀物の46.6％に相当する

第 9 表．ロシア共和国の穀物調達における雑草の混入の状態（1958年11月 1 日時点）

単位：千トン

	調達量	雑草が混入した穀物		全体に対する％	
		ちゃひき	よもぎ	ちゃひき	よもぎ
ロシア共和国	31902.7	4077.2	1419.2	12.8	4.4
西シベリア	7529.9	2984.5	1311.7	39.6	17.4
アルタイ・クライ	4462.0	2081.1	213.6	46.6	4.8
オムスク州	1412.7	381.9	533.1	27.0	37.7
ノヴォシビルスク州	1206.5	416.9	515.3	34.5	42.7
ケメロヴォ州	366.2	95.6	41.2	26.1	11.2
トムスク州	82.5	9.0	8.5	10.9	10.3

資料）Андреенков 2007：127.

208万1000トンに雑草である「ちゃひき」が混入していた。また，ノヴォシビルスク州から調達された穀物の42.7％に相当する51万5300トンに雑草である「よもぎ」が混入していた。「ちゃひき」「よもぎ」の混入した穀物は，西シベリア全体で429万6200トンにものぼり，それは穀物調達量の57％にも相当した（Андреенков 2007：126–127）。

収穫後の穀物の精選および乾燥作業は，対応する設備が不足ないしは欠如しており，適切な作業が実行できなかった。収穫された大部分の穀物は，穀物倉庫の不足のため，屋外の作業所で地面に直接，山積みにされていた。この状態で雨が降ると，穀物の湿度は上がり，発芽が始まってしまう。このため，収穫された穀物を保全するため，多大な手作業がおこなわれた。この主体となったのは，動員された学生であった。彼らは，山積みされた穀物を乾燥させるために，シャベルで穀物をかき集め，それを別の方向へ放り投げるという作業に従事した。この作業は何日も続く，極めて効率の悪いものであった。先に紹介したダチヤーナ・レオノーヴァもこれに従事したが，「ほとんど意味のない作業」との感想を記している（60-лет 2014：256）。穀物の収穫後作業の機械化は進まなかった。1954年のアルタイ・ゼルノトラストの例をあげれば，235の作業場中，機械化されていたのはわずか88であった。この結果，多くの穀物が失われた。例えば，カメンスキー地区のモロトフ名称コルホーズ，「プログレス」「赤いシベリア人」では，1954年 9 月末までに何百ツェントネルもの穀物が作業所で失われた（Алейников 2005：94–95）。

調達された穀物は，雑草まみれであるだけではなく，過剰な水分を帯びた湿った状態のものが多かった。第10表は，アルタイ・クライの穀物受領所に納入された穀物の水分含有量の推移であるが，このことが確認できる。「個々の場合，水分は35～40％に」も達していた（Мельников 1961：87）。ロシア全体では，1956年に国家に引き渡された2180万トンの小麦のうち湿質のもの，水分過剰のものは，1700万トンを超えていた。1958年の場合には，820万トンの穀物が水分過剰で引き渡されたおり，それは全体の25.8％に相当した。また，100万トン以上の穀物は，発芽したものが15％も含まれていた（Андреенков 2007：126）。状況は，その後も改善しなかった（Томилин 2009：86）。

穀物の保管体制にも問題があった。開拓地域においては，そもそも穀物貯蔵施設は不足していた。このため，各地で新規建設が行われた。例えば，アルタイ・クライでは，1955～1959年の間に，17万3100トンの穀物が貯蔵できる穀物エレベーター，334万4100トン分の穀物倉庫が建設された

第10表．アルタイ・クライの穀物受領所に納入された穀物の含水率別分類

単位：%

	1954年	1955年	1956年	1957年	1958年	1959年	1960年	過去７年間 最大値	過去７年間 平均値	過去７年間 最小値
乾燥・中位乾燥（含水率15.5%未満）	4.9	23.0	16.2	21.2	15.0	27.6	4.5	27.6	16.0	4.5
湿質（15.5%～17%未満）	16.3	25.5	25.3	26.3	12.0	20.6	7.3	26.3	19.0	7.3
過湿・制限規格内（17%～19%未満）	39.1	26.2	29.5	29.4	21.0	23.2	13.2	39.1	25.0	13.2
過湿・制限規格超（19%以上）	39.7	25.3	29.0	23.1	52.0	28.6	75.0	75.0	38.0	23.1
過湿以上（17%以上）	78.8	51.5	58.5	52.5	73.0	51.8	88.2	88.2	63.0	51.5
湿質以上（15.5%以上）	95.1	77.0	83.8	78.8	85.0	72.4	95.5	95.5	82.0	72.4

資料）Мельников 1961：88.

（Алейников 2005：108）。だが，建設の質は高いものではなく，倒壊事故が相次いだ。例えば，ノヴォシビルスク州カラスーク地区では，穀物エレベーターの倒壊事故が発生し，２人の死者が記録されている（Андреенков 2007：90）。さらに量的にみても，それは要求を満たすものではなく，貯蔵施設不足は継続した。このため，多くの穀物は，藁で覆われた状態で一時的に保存された。1956年には，ウラルとシベリアの開拓地区では，そのような保管所は１万2000存在し，収穫された穀物の47%が保管された。穀物は，保管中に品質が低下するとともに，窃盗された（Андреенков 2016：212）。

開拓地域では，交通網もほぼ完全に欠如していた。わずかに存在する道路は，圧倒的な部分が「土のままの道路」であり，秋・冬には利用不能となった。このため，自動車があっても穀物は適期に輸送できず，その損失を増加させた（Алейников 2005：91，100.）。一方，穀物受領所の体制も整っていなかった。穀物受領は，しばしば量りなしでおこなわれ，このため計算単位として，自動車の台数や車体数が使われた（Андреенков 2016：212）。以上の状況をふまえて，1957年５月23日付けのソ連閣僚会議決定は，開拓地区のソフホーズの穀物引渡しについて，収穫期での穀物受領所への輸送が不可能な際には，それぞれの経営で一時保管することを許可した。この決定に従い，ロシアおよびカザフスタンのソフホーズでは，1957年10月１日時点で233万3000トンの穀物が一時的に保管されたと報告された。ただし，この実践は報告の水増しを誘発した。後に，実際の保管量は，少なくとも19万4200トン（うちロシアは15万1000トン）不足していることが明らかになった（РГАЭ：4372/57/668/128-129）。

以上の結果，調達された穀物の質は，著しく低下した。小麦に含有されているタンパク質とグルテンの量を比較すると，1958～1962年の平均数値は，1949～1952年のそれを下回っていた（Андреенков 2007：133）。処女地の穀物は，高品質小麦粉の加工，輸出，国家備蓄，種子フォンド用には，あまり適していなかった（Андреенков 2016：213）。これに加えて，穀物調達量は，1959年からは穀物支出量を下回り，国家の穀物備蓄は，再び減少を始めた（第11表）。

第11表．穀物バランスの推移

単位：百万トン

	1950年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年
穀物調達	32.3	56.6	46.6	46.7	52.1	56.6	44.8	68.3
穀物支出	30.5	49.1	46.9	50.0	54.2	56.6	51.2	58.2
国家の穀物備蓄*	16.0	13.7	11.8	10.2	7.5	6.3	6.3	7.0

資料：Зеленин 2001：214.
*各年7月1日時点。

5．おわりに

近年の処女地開拓に対する評価の変化には，明らかに「ソ連にとっての処女地開拓」から，「ロシアにとっての処女地開拓」という視座の転換が関連している。つまり，「ソ連」の視点にたてば極めて重要であった，東部地区における新しい穀倉の出現，構成共和国間分業体制の深化，開拓過程における諸民族の友好と協力関係の強化等は，「ロシア」一国の視点にたてば，明らかにメリットは少ない。逆に，「ロシア」の視点にたてば，処女地開拓は，東部に資金を集中させた結果，ロシア中央部の発展を抑制してしまった，ということになる。

以上の変化を典型に示していると思われるのが，次のような評価である。処女地開拓は，「経済的な観点からは，正しくなかった。新しい土地の収穫は，全体として，高くなかった。1956年の高収穫を例外として，毎年の穀物収穫は，期待に反して，ロシア共和国平均よりもほぼ20%低かった」。同時に莫大な資本投資，物的・人的資源が処女地開拓に投入され，「古い耕地」のコルホーズおよびソフホーズ，とりわけ中央黒土地帯から注意を逸らせ，その後の漸次的な荒廃を導いた（Вербицкая 2002：52–53）。

さらに近年では，処女地開拓にともなって，ロシア・カザフスタン国境の変更が行われたとの指摘も現れている。この結果，オレンブルク州およびオムスク州の一連の地区がカザフスタンに「割き加え」られたというのである（Пихоя 2000：171）。これは，現在のクリミア問題を連想させるような事例である。

評価の視座の転換に加えて，処女地開拓の成果が永続的ではなかったこと，処女地の穀物の質に問題があったことから，フルシチョフ自身も提起した「処女地開拓」に代わるもうひとつの選択肢であった既耕地の「集約化」に注目が集まることになった。そして，「処女地開拓ではなく，ロシア中央部の農業の集約化に着手していたならば，成果はより大きなものになったはずである」という推論が注目を集めている。

だが，筆者は，本稿で行った考察をもとに，この推論を否定する。なぜならば，当時の指導者は，1930年代のスタイルを強く維持していたからである。そのため，彼らは，キャンペーンに基づく量的な課題の達成には秀でていたが，日常的な指導に基づく質的な課題の達成では成果を残せなかった。既耕地での単位面積収穫量の引き上げは，まさに後者に分類される課題であるから，その実現は困難であるように思われるのである。

キャンペーンによって処女地に動員されたカードルの質は高くはなく，さらにそのようなカードルですら定着しなかった。このような条件下では，穀物を連作するということが唯一実行可能な方法であったように思われる。再びレオノーヴァの回想を引用すれば，耕地で農業技師を見たことは

なく，処女地ソフホーズにおいて「農業技術的な管理は，まったくなかった（агрономического контроля совсем не было）」という（60-лет 2014：256）。

指導者およびカードルに問題が存在した1950年代において，処女地開拓は，唯一実行可能だった穀物問題の解決方法であった。そして，処女地開拓は，その後に多くの解決すべき問題をも残したのだが，たしかに10年という時間を稼いだのである。

［付記］本稿は，平成29年度専修大学研究助成（第１種・個別）「ロシアにおける農村開発政策の歴史的原点の解明」および平成29年度北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（「共同利用型」の個人による研究（研究課題名「ロシアにおける処女地開拓の再検討（1954～1964年）」）による研究成果の一部である。

［文献リスト］

中山弘正（1976）『現代ソヴェト農業―フルシチョフ農政と位階制的職種階層―』東京大学出版会

野部公一（1986）「処女地ソフホーズの組織―カザフスタン1954～1956年―」『土地制度史学』第120号

野部公一（1989）「処女地開拓の再検討：1954～56年―カザフスタンの処女地ソフホーズを題材にして―」ソビエト史研究会編『ソ連農業の歴史と現在』木鐸社

野部公一（1990）「処女地開拓とフルシチョフ農政―カザフスタン 1957～1963年―」『社会経済史学』第56巻第４号

野部公一（1991）「コルホーズのソフホーズへの転換（1954～1965年）」岡田与好編『政治経済改革への途』木鐸社

野部公一（2017）「農村の近代化と生活水準の向上」松戸清裕編『ロシア革命とソ連の世紀３・冷戦と平和共存』岩波書店

Алейников М. В.（2005）, *Сельское хозяйство Алтайского края в период освоения целинных земель（конец 1953−1964 гг.）*. Бийск.

Андреенков С. Н.（2004）, Хлебозаготовительные кампании в Новосибирской области 1957−1958 гг. : изменение стиля партийного руководства. *Сибирская деревня : проблемы истории*. вып.1. Новосибирск.

Андреенков С. Н.（2007）, *Аграрные преобразования в Западной Сибири в 1953−1964 гг*. Новосибирск.

Андреенков С. Н.（2008）, Сельское хозяйство в середине 1950-х–начале 1960-хгг. *Аграрные преобразования и сельское хозяйство Сибири в XX веке. Очерки истории*. Новосибирск.

Андреенков С. Н.（2016）, *Колхозно-совхозная система в Сибири в 1946 − 1964 гг. : функционирование и реформирование*. Новосибирск.

Богденко М. Л.（1972）, *Совхозы СССР. 1951−1958*. М.

Богденко М. Л.（1974）, Проблемы массового освоения целинных и залежных земель в советской литературе. *История СССР*. №. 4.

Великий（1979）, *Великий подвиг партии и народа–массовое освоение целинных и залежных земель. Сборник документов и материалов*. М.

Вербицкая О. М.（2002）, *Население российской деревни в 1939−1959 гг. : проблемы демографического развития*. М.

Зеленин И. Е.（2001）, *Аграрная политика Н. С. Хрущева и сельское хозяйство*. М.

Иржичко В.（1956）, К вопросу о севооборотах в колхозах и совхозах Западной Сибири. *Сельское хозяйство Сибири*. №. 2.

История（1988）, *История советского крестьянства*. Т. 4. М.

КПСС 8（1985）, *КПСС в резолюциях и решениях Съездов, Конференций и Пленумов ЦК*. Т. 8. М.

Кузнецов В. В.（2005）, *Роль печати в организации освоения целинных и залежных земель на Алтае（1954−1960 гг.）*. Барнаул.

Куликов В. И.（1984）, Исторический опыт партии по руководству массовым освоением целины и современность.

Вопросы истории КПСС. №. 4.

Медников В. П.（1967）, *Опыт партийной работы в совхозах Алтая*. Барнаул.

Мельников В.（1961）, Качественная характеристика зерна из хозяйства Алтая. *Сельское хозяйство Сибири*. №. 9.

Мемуары（1994）, Мемуары Никиты Сергеевича Хрущева. *Вопросы истории*. №. 12.

МС（2013）, *Мобилизационная стратегия хозяйственного освоения Сибири : программы и практики советского периода（1920−1980-е гг.）*. Новосибирск.

Орлов Д. С. и С. Н. Андреенков（2010）, *Аграрный сектор Новосибирской области в середине 1950-х–первой половине 1970-х гг*. Бийск.

Пахомова Е. В.（2007）, Фактор материальной заинтересованности колхозников в освоении целинных и залежных земель. *Мир крестьянства Среднего Поволжья итоги и стратегия исследований*. Самара.

Пихоя Р. Г.（2000）, *Советский союз : история власти 1945−1991*. Новосибирск.

Регион（2009）, *Региональная политика Н. С. Хрущева. ЦК КПСС и местные партийные комитеты 1953−1964 гг*. М.

Сибирь（2002）, *Сибирь : проекты XX века（начинация и реальность）*. Новосибирск.

Сорокин В. В.（1998）, *Последний в когорте《железных》вождей*. Барнаул.

СХ（1960）, *Сельское хозяйство СССР*. М.

СХХ（2012）, *Сельское хозяйство Сибири в XX веке : проблемы развития и кризисы*. Новосибирск.

Томилин В. Н.（2009）, Кампания по освоению целинных и залежных земель в 1954−1959 гг. *Вопросы истории*. №. 9.

Фишман Я.（1956）, Механизированные тока в Борисовском совхозе. *Сельское хозяйство Сибири*. №. 2.

Хрущев 1（1962）, Хрущев Н. С. *Строительство коммунизма в СССР и развитие сельского хозяйства*. Т. 1, М.

Шмелев Г. И.（2000）, *Аграрная политика и аграрные отношения в России в XX веке*. М.

60-лет（2014）, *Как поднимали целину. 60-летию начала освоения целинных и залежных земель посвящается*. М-во сельского хоз-ва Российской Федерации. М.

РГАЭ, Российский государственный архив экономики. 本文中では，順にフォンド／オーピシ／ヂェーラ／リストを記す。

注

1）代表的なものとしては，Алейников 2005，Андреенков 2007，Орлов и Андреенков 2010等が存在する。

2）詳しくは，Богденко 1974およびКуликов 1984を参照。

3）処女地開拓に関しては，カザフスタンを主な事例とする，野部 1986，野部 1989，野部 1990も参照されたい。

4）行政区画のクライ（край）は，「地方」と訳出されるのが一般的である。しかし，本稿においては，一般名詞の「地方」との混同を避けるため，「クライ」と表記する。

5）人員・機械の確保の詳細に関しては，野部1986も参照されたい。

6）なお，ボグヂェンコによれば38とされている（Богденко 1972：115）。

7）例えば，РГАЭ：7803/6/1131/43；1157/21等。

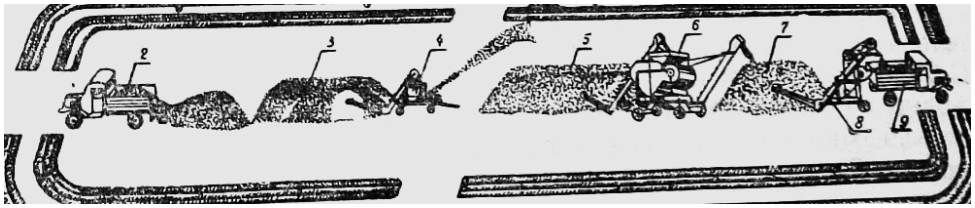
8）カザフスタンの場合は337経営中，わずか34であった（РГАЭ：7486/21/378/51）。

9）このような大量の休耕地の発生には，前述のように，大幅にひきあげられた開拓計画達成のために，質の悪い土地の開拓が行われたことも，影響を与えている。

10）当時の穀物の収穫後の精選および乾燥作業の概要に関しては，その当時の雑誌に紹介された先進的ソフホーズにおける「機械化された穀物精選過程」の解説によって確認することができる（補図参照）。それによれば，まず作業場には未精選穀物がトラックによって持ち込まれ(2)，山積みされる(3)。この未精選穀物はまずは事前精選により混入物が排除されるとともに乾燥される(4)。事前精選過程を終えた穀物(5)は，さらに風選機（ВС−8М）により入念な精選が行われる(6)。最終的な精選の終わった穀物(7)は，自動積載機（ЗП−40）によって(8)，トラッ

クに積み込まれる(9)のである。

すでに本文で指摘したように，圧倒的多数の経営において，この過程は機械化されていなかったから，この間の穀物はすべて人力によって積み下ろしされていた。



補図．機械化された穀物精選過程

資料：Фишман 1956：61.

11）カードル確保におけるソフホーズの優位性に関しては，野部 1990：33–35；野部 2017：43–46も参照されたい。